荒海の槍騎兵 1

連合艦隊分断

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

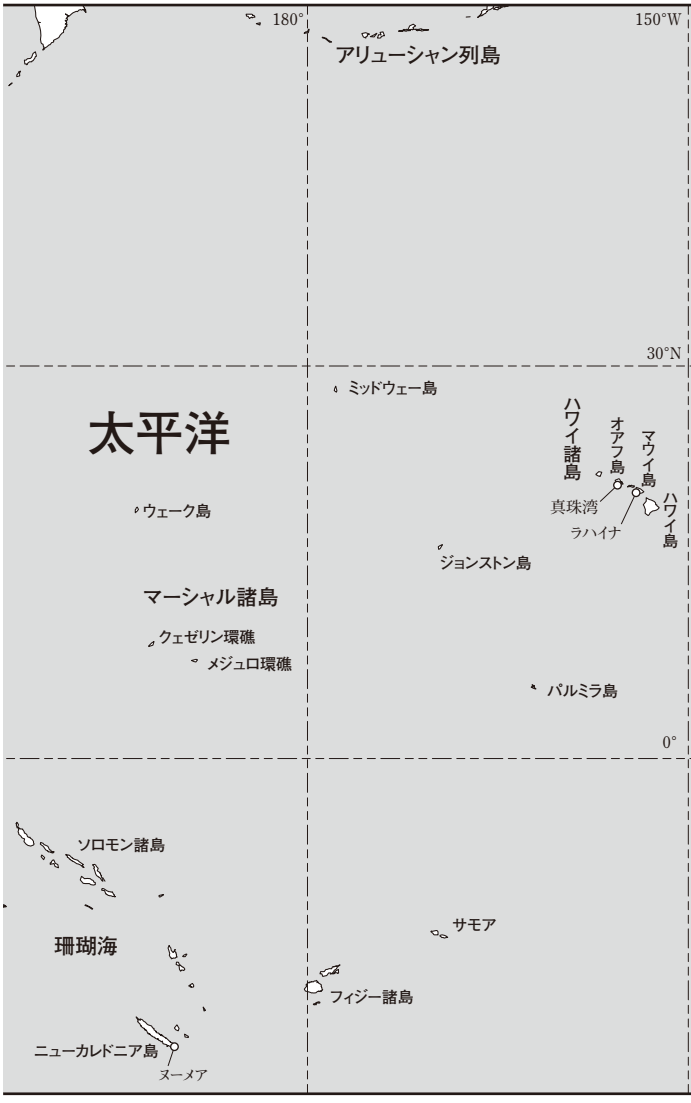
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

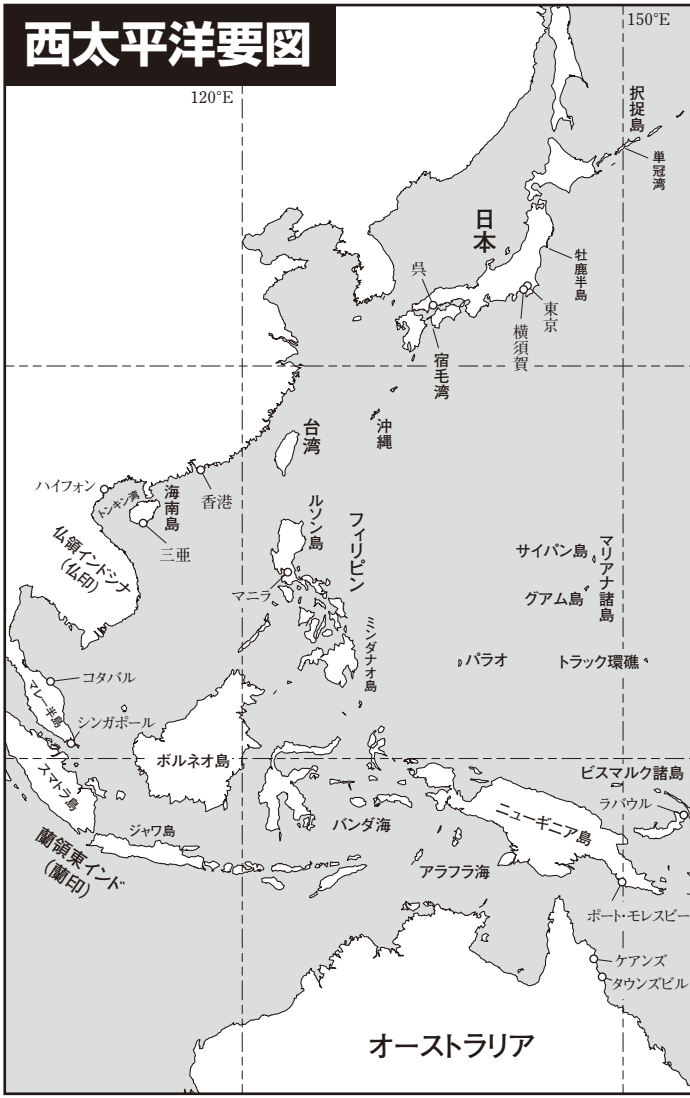
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目次

序章　9
第一章　長槍の艦　17
第二章　ホノルルに消ゆ　29
第三章　回航された脅威　51
第四章　「共ニ征カン、イザ」　91
第五章　海南島（かいなんとう）沖海戦　141
第六章　英国戦艦（プリンス・オブ・ウェールズ）追撃　217

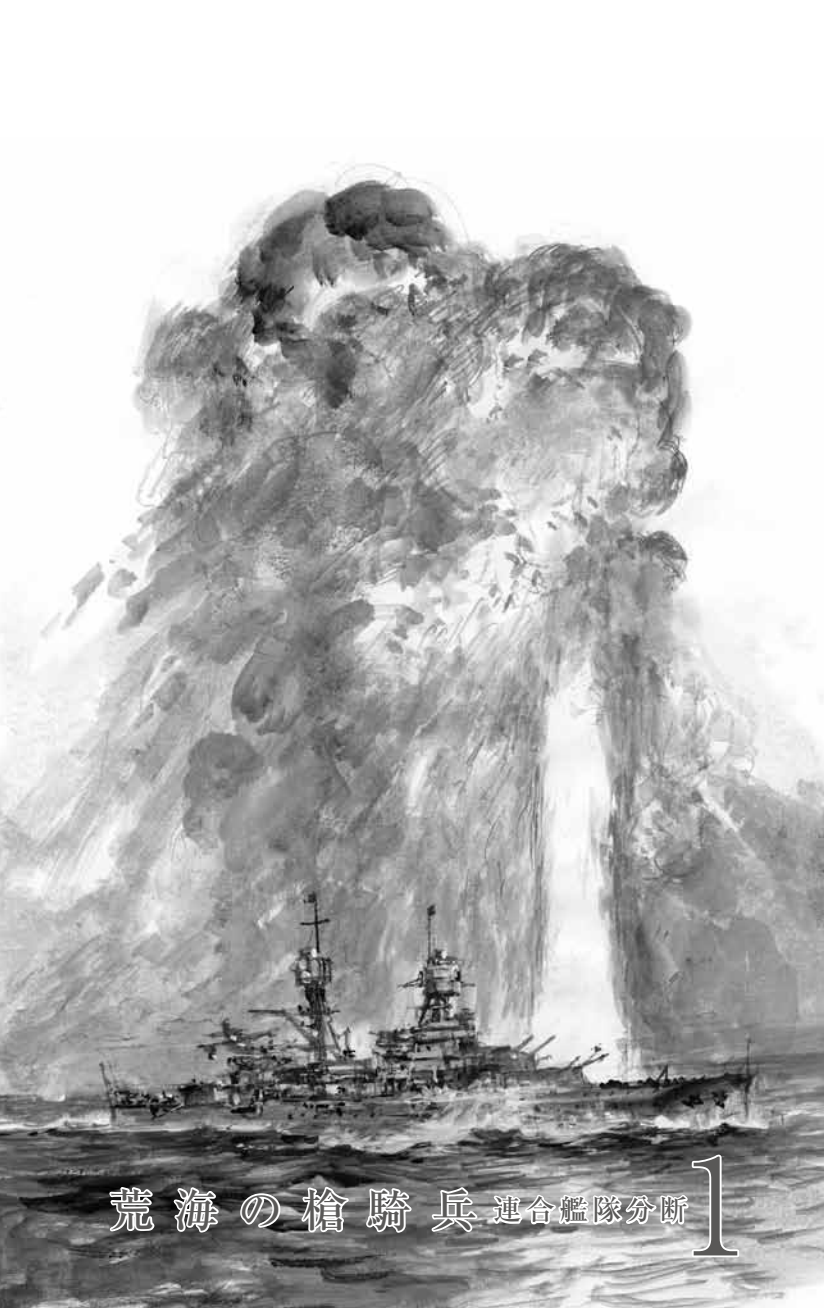

180°
150°W
アリューシャン列島
30°N
太平洋
ミッドウェー島
ハワイ諸島
オアフ島
マウイ島
ハワイ島
真珠湾
ラハイナ
ウェーク島
ジョンストン島
マーシャル諸島
クェゼリン環礁
メジュロ環礁
パルミラ島
0°
ソロモン諸島
珊瑚海
サモア
フィジー諸島
ニューカレドニア島
ヌーメア

西太平洋要図


120°E
150°E
択捉島
単冠湾
日本
牡鹿半島
呉
東京
横須賀
宿毛湾
沖縄
台湾
香港
ハイフォン
トンキン湾
海南島
三亜
仏領インドシナ（仏印）
ルソン島
フィリピン
マニラ
ミンダナオ島
サイパン島
マリアナ諸島
グアム島
パラオ
トラック環礁
コタバル
マレー半島
シンガポール
ボルネオ島
スマトラ島
ジャワ島
蘭領東インド（蘭印）
バンダ海
アラフラ海
ニューギニア島
ビスマルク諸島
ラバウル
ポート・モレスビー
ケアンズ
タウンズビル
オーストラリア

フィリピン要図

ルソン島
リンガエン湾
クラークフィールド飛行場
バターン半島
マニラ
ニールソン飛行場
ニコルス飛行場
マニラ湾
コレヒドール島
バタンガス
キャビテ
太平洋
カタンドゥアネス島
ラガイ湾
サン・ベルナルディノ海峡
ミンドロ島
シブヤン海
ミンドロ海峡
シブヤン島
マスバテ島
カルバヨグ
サマール島
ビサヤン海
パナイ島
レイテ島
スルアン島
タクロバン
ドラグ
レイテ湾
ホモンホン島
ディナガト島
セブ島
ネグロス島
ボホール島
ミンダナオ海
ミンダナオ島
0 100 200 300 km
0 100 浬



荒海の槍騎兵 連合艦隊分断 1

序章

亜熱帯圏のぎらつく陽光の下、大小二十数隻の艦が認められた。

航跡は、さほど長くない。速力は一四、五ノットといったあたりだ。

「巡洋艦が七隻、残りは駆逐艦だな」

アメリカ合衆国陸軍第一四爆撃飛行隊の指揮を執るマイケル・ウォーカー中佐は、敵艦の様子を観察して呟いた。

荒野をゆく幌馬車と、護衛の騎兵隊を思わせる陣形だ。

巡洋艦一隻を中央に配置し、他の巡洋艦と駆逐艦が周囲を囲んでいる。

「『セター』より『ハンター』、目標の指示願う」

二番機の機長ジェフ・ロッドマン大尉の声が、無線機のレシーバーに響いた。

「さて、どうするかな」

ウォーカーは即答せず、思案を巡らした。

指揮下にあるボーイングB17〝フライング・フォートレス〟は、ウォーカー自身の機体を含めて四機。爆弾槽には一〇〇〇ポンド爆弾六発ずつを搭載しているから、合計で二四発を投下できる。

重要目標に全機を集中するか、全艦をまんべんなく叩くか。

「『ハンター』より『猟犬』。中央の艦を狙う」

ウォーカーは断を下した。

中央の艦は、旗艦と推測できる。

現代の戦争は、指揮官の首を取って終わりになるほど単純ではないが、司令官や参謀の喪失は、日本軍にとり、かなりの打撃になるはずだ。

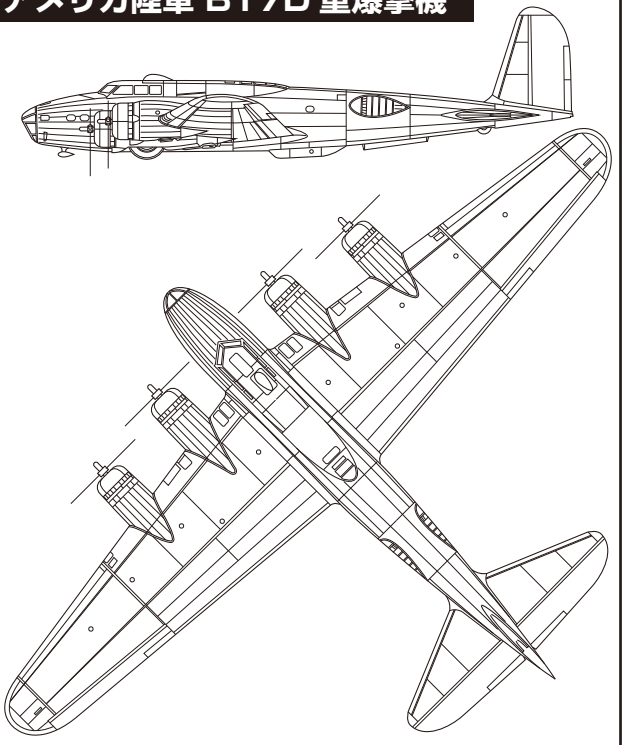
「『セター』了解」

「『ポインター』了解」

「『ビーグル』了解」

各機の機長が復唱を返し、一番機を先頭に、縦一列に展開する。

アメリカ陸軍 B17D 重爆撃機



全長	20.7m
翼幅	31.6m
全備重量	23,814kg
発動機	ライト・サイクロン R-1820-60　1,200馬力×4基
最大速度	520km/時
兵装	7.62mm機関銃×7丁 爆弾 5,440kg(最大)
乗員数	8名

米陸軍の最新鋭重爆撃機。長大な航続力と５トンを上回る爆弾搭載能力、排気タービン過給機による優れた高高度性能を併せ持つ機体で、敵国の軍需工場や橋梁、鉄道などを目標とした戦略爆撃を得意とする。

防御力も高く、撃墜は困難と言われており、比島に配備された数十機は、南方資源地帯への進出を目指す日本軍の強敵になると目されている。

「目標針路四五度、速力一四ノット」
機首の爆撃士席に座るダンカン・シュワルツ中尉が報告する。
ドイツ系移民の子孫らしい、堅苦しい英語を操るが、照準器のような精密機械を委ねるには相応しいように感じる。
ウォーカーは高度計を見た。
針は、二万フィート（約六〇〇〇メートル）を指している。
「『ハンター』より『ハウンズ』。現在の針路、高度を維持せよ」
ウォーカーは全機に命じた。
高度を下げれば命中率は上がるが、対空砲の被弾確率も高くなる。
本国からの増援は望めない状況だ。不必要な危険を冒して、貴重な機体とクルーを失ってはならない。
「シマロン軍曹、後続機の状況報せ」
「全機、異常なし。本機に追随しています」
ウォーカーの問いに、尾部銃座を受け持つマイク・シマロン軍曹が、インカムを通じて報告した。
「投下間隔のセットよし。針路、右に二度修正」
シュワルツが報告を上げた。
「右に二度。了解」
ウォーカーは復唱を返し、ステアリング・ホイールを僅かに右に回した。
本国では、照準器と操縦系統を連動させることで、命中率を飛躍的に高める新型の照準装置が開発されたというが、ウォーカーらが所属する14BSのB17には装備されていない。
爆撃士の指示に従い、操縦士が針路を微調整する。昔ながらのやり方で、投弾コースを決めるのだ。
敵の艦上に、発射炎は観測されない。
高度二万フィートは対空火器の射程外なのか。あるいは、四発重爆の水平爆撃など当たるはずはないと高をくくっているのか。
後者であれば、合衆国が誇る「空の要塞」を

侮ったことを、彼らは深く後悔することになろう。
「爆弾槽開け」
「爆弾槽、開きます」
シュワルツが復唱を返す。
爆弾槽の扉を開いたことで空気抵抗が増大したためだろう、B17の速度が僅かに落ちる。
目標は、前方に見えている。
間もなくその頭上から、四機合計二四発の一〇〇〇ポンド爆弾が降り注ぐ。
分厚い防御装甲と高い攻撃力を併せ持つ重爆撃機が鉄槌を振り下ろしたとき、日本人はB17が「空の要塞」と呼ばれている所以を知ることになろう。
輪型陣の右側を固める巡洋艦とおぼしき艦艇は、ウォーカーの目に入っていなかった。
「敵艦二隻、発砲！」
との報告をシュワルツが上げても、ほとんど気にとめなかった。
衝撃は、出し抜けに襲って来た。
ウォーカー機の左下方で爆発が起こり、襲って来た爆風に、機体が大きく煽られた。
「……！」
ウォーカーは思わず叫び声を上げた。
ウォーカーだけではない。一番機のクルー全員が、予期せざる衝撃に、驚愕の声を上げていた。
二秒後、今度は右方から横殴りの爆風が襲った。
ウォーカー機は、強烈なフックを食らったボクサーのように、左に大きくよろめいた。
「二、三番機に至近弾！」
シマロンの叫びが、インカムを通じて伝わる。
数秒間の空白の後、新たな敵弾が炸裂し、三度目の衝撃が襲って来る。
左方から爆風が襲い、ウォーカー機は右に傾く。
四度目、五度目と、およそ二秒置きに敵弾が炸裂する。左右のフックを、交互に食らっているようだ。
通算七度目の砲撃を食らった直後、

「四番機、被弾！　三番エンジンに火災！」
シマロンが、悲痛な叫びを上げた。
ウォーカーは咄嗟に首をねじ曲げ、右後方を見た。
炎と黒煙が一瞬見えたが、すぐに視界の外に消える。B17は自動消火装置を装備しているが、火の回りが速く、消火に失敗したのかもしれない。
ウォーカーが前に向き直ったとき、八度目の射弾が後ろ下方で炸裂した。
蹴り上げられたような衝撃が襲い、機首が大きく前にのめった。
「シマロン、無事か⁉」
ウォーカーはシマロンを呼び出すが、応答がない。尾部銃座に、弾片が命中したのかもしれない。
「シマロン！」
諦めきれず、もう一度シマロンを呼び出したとき、九度目の爆発が起こり、一発が至近距離で炸裂した。
衝撃はこれまでで最も大きく、ウォーカー機は乱気流に巻き込まれたように激しく揺れた。右主翼から、何かが壊れるような音が伝わった。
「右主翼被弾！　補助翼がちぎれた！」
右側面銃座を担当するウォルター・キーガン伍長が、インカムを通じて報告する。
「ジョニー、司令部に報告！　『敵艦の対空火力、極めて強力なり』と！」
ウォーカーは、無線手のジョニー・ヒックス少尉に命じた。
同時にステアリング・ホイールを左に回し、回避行動を取った。
激しい対空砲火を放って来るのは、輪型陣の右側に位置する二隻だけだ。その艦を避け、目標の後方に回り込むのだ。
機体が大きく左に傾き、眼下の敵艦が右に流れる。
三機となったB17は、対空砲火を回避しつつ、目標の後方へと回り込んでゆく。
炸裂する敵弾が、一旦遠ざかった。
「『敵艦の対空火力、極めて強力なり』。司令部に連

絡します！」
　ヒックスが復唱を返したとき、敵弾が再び至近距離で炸裂した。
　敵艦の対空砲は、射程が長く、狙いが正確なだけではない。動きも速く、航空機の動きに追随している。
「くそったれ！」
　ウォーカーは罵声を放った。
　敵艦から更に遠ざかるべく、ステアリング・ホイールを回したとき、正面に閃光が走った。
　ウォーカーが両目を大きく見開いたとき、けたたましい音と共に風防ガラスが割れ砕け、無数のガラス片と鋭い弾片が、コクピットの中に殺到した。
　一瞬で操縦者を失ったB17は、原形を留めたまま、炎も煙も噴き出すことなく、海面に向かって落下していった。

第一章　長槍の艦

1

柱島泊地に錨を下ろしている艨艟の中にあって、その艦は異彩を放っていた。

大きさだけなら、さほど目立つ艦ではない。

広島県呉を母港とする重巡洋艦――妙高型や高雄型に比べ、やや小さい。

艦を特徴付けているのは、その兵装だ。

重巡の標準装備となっている二〇・三センチ連装砲も、軽巡の兵装である一四センチ単装砲もない。

主砲があるべき場所を埋めているのは、半球型の砲塔と、針のように細長い砲身を持つ高角砲だ。

軍艦「青葉」――姉妹艦の「衣笠」や準同型艦の「古鷹」「加古」と共に大規模な改装を受け、「防空巡洋艦」、略称「防巡」という従来になかった艦種に生まれ変わった艦が、倉橋島の西岸近くに錨を下ろしていた。

「長槍を林立させているようだな」

内火艇の後部キャビンで、近づいて来る「青葉」を見つめながら、海軍少佐桃園幹夫はそんな感想を抱いた。

「青葉」の前部と後部に三基ずつ、合計六基の連装高角砲が並び、細く長い砲身に仰角をかけている様は、何本もの長槍を構えているようだ。

前部の一、二、三番高角砲、後部の四、五、六番高角砲が三角形に配置されている様は、楔のような鋭さを感じさせる。

実戦の場では、逆落としに突っ込んで来る急降下爆撃機や、海面すれすれの高度から向かって来る雷撃機に対し、一二門の砲身から、鉄と火薬の穂先を突き込むことになる。

「槍足軽で終わるか、天下一の槍名人になるかは、訓練次第というわけだ」

桃園は、徳川家康の下で勇名を馳せた本多忠勝や、豊臣秀吉麾下の名将加藤清正を思い出している。

どちらも、槍の名人として知られた武将だ。
「青葉」を始めとする四隻の防巡を、「帝国海軍の本多忠勝」「連合艦隊の加藤清正」と呼ばれるところまで仕上げてやる――そんな野心を、桃園は胸に抱いていた。
五分後、桃園は、「青葉」が旗艦を務める第六戦隊の司令部幕僚と向き合っていた。
「青葉」と同じく、呉鎮守府に所属する「加古」と、横須賀鎮守府に所属する「衣笠」「古鷹」を指揮下に置いている。
「申告します。海軍少佐桃園幹夫、砲術参謀として第六戦隊司令部勤務を命じられました」
「御苦労」
直立不動の姿勢を取って敬礼した桃園に、第六戦隊司令官五藤存知少将が、答礼を返した。
がっしりとした体格の持ち主だ。整った容貌は、よく日に焼けている。目の光や引き締められた顎から、意志の強さが伝わって来る。
短く刈った髪や、刈り揃えられた口ひげには、ところどころに白いものが混じっている。
艦船勤務一筋で自らを鍛え上げた、海上の武人といった風格だ。
桃園が辞令を受け取ったときに聞かされた話では、海軍生活のほとんどを艦船勤務で過ごして来たということだった。
その五藤が、値踏みをするように、桃園を見つめている。
桃園は華奢な肉体に、名前の通り、桃のような丸顔を持っている。少佐任官後、地上勤務が長かったため、あまり海軍軍人らしく見えない。
軟弱そうな奴だ、と言いたげだった。
「言っておくが、俺の専門は水雷だ」
おもむろに、五藤は言った。
「夜戦の駆け引きについては、ある程度分かっているつもりだが、飛行機との戦い方となると、正直、あまり自信がない」

「私も、司令官と同じ立場だ。本艦や『加古』『古鷹』『衣笠』の艦長も同じだろう」

五藤の傍らに控えている、首席参謀の貴島掬徳中佐が言った。中肉中背の、人の良さそうな顔つきの士官だ。

「本艦の砲術長は、貴官は変わり者だが、対空射撃に関しては指折りの専門家だと言っていた。その知見に、期待しているのだが」

「好き好んで対空射撃の研究をしたがる者は、あまりいませんから」

桃園は苦笑した。

海軍士官の多くがそうであるように、桃園も海軍兵学校を卒業した後、砲術の専門家を志した。

砲術は、何と言っても海軍の花形だ。戦闘の中核になるだけではない。海軍省や軍令部のエリートも、多くを砲術の出身者が占めている。

「未来の東郷平八郎（日露戦争時の連合艦隊司令長官）」を夢見て、江田島を受験した若人なら、誰もが憧れる道なのだ。

幸い、桃園は志望が認められ、大尉任官後に海軍砲術学校の高等科学生として、高度な砲戦技術について学ぶ機会を得た。

桃園が他の学生と異なっていたのは、「対空射撃の研究をしたい」と指導教官に申し出たことだ。

中尉時代に普通科学生として水雷学校で学んでいたとき、講義にやって来た航空科の士官が、

「航空機の世界は日進月歩だ。飛行機と空母が海軍の主力となる日は、必ずやって来る。海軍航空隊は、優秀な若者を求めている。我と思わん者は、是非航空界に来たまえ」

と、熱心に説いたのだ。

桃園は、自分が飛行機乗りに向いているとは思わなかったが、航空機の急速な進歩や、「大艦巨砲主義から脱却して、航空機と空母を海軍の主力にすべし」と主張する人々の存在は知っていた。

航空主兵思想の提唱者は、日本だけではなく、日

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。